

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 権 桃楹ユン トモユン

光源氏は、実直な「まめ人」として社会生活を営みつつ、女性を恋してやまない「すき心」をほぼその全生涯にわたって抱き続けた。『源氏物語』正篇は、いかにしてそのような光源氏像を形象することができたのか。本論文はそのような関心を軸にして、光源氏の生涯を若年期・壮年期・若菜巻以後の三期に分け、それぞれの時期における物語の光源氏形象の方法を丹念に分析したものである。序章と終章を除く本論部分は、上記の三期に対応する三部七章から成る。

第一部第一章「頭中将の視線」は、頭中将が「まめ人」光源氏の「すき」を暴く役割を果たしながら、その頭中将もついに与り知ることのなかった秘事として描かれる藤壺との恋の深刻さを指摘する。第二章「若紫登場の意義」は、藤壺に対する源氏の恋慕は、その姪の若紫に寄せる思いを通して描かれながら、若紫との関係が世間の評判になることで、藤壺との関係は世に知られずに済んだのだと説く。

第二部第一章「六条御息所の再登場」は、六条御息所の、源氏との愛に傷つき苦悩した女としての位相と、秋好中宮の母としての位相に注目し、前者は物語の女人苦の主題を担いつつ、後者は光源氏の養女となった秋好中宮が源氏の栄華を招来するという物語展開を支えていると分析する。第二章「玉鬘十帖の意義」は、同じく自身の養女とした玉鬘への恋心を募らせつつ自制する源氏を通して、源氏の老いを描くとともに、また源氏を諫める子息夕霧の成長をも描いていると論ずる。

第三部第一章「光源氏の老い」は、物語が源氏自身の老いの自覚と、彼をいつまでも若々しいと見る周囲の視線との齟齬を意図的に描き出し、そこから女三の宮の降嫁に始まる一連の悲劇が胚胎したことを論ずる。第二章「幻巻の一年」は、正篇最後の巻である幻巻の丹念な読みを通して、紫の上を喪った悲しみに打ちのめされていた光源氏が、歳末にはその悲しみを受け入れ、自身に残された命をいとおしむようになっていることを指摘する。第三章「夕霧巻再考」は、夕霧が引き起こした落葉の宮とのスキャンダルについて、源氏がむしろ落葉の宮の非を咎めたことが、紫の上の「女ばかり身をもてなすさまも所狭う、あはれなるべきものはなし」という述懐を引き出したのであり、紫の上のこの述懐は、「すき」と「まめ」を調和したような光源氏の生き方も、結局女性たちの人生を抑圧するものだったことを明らかにしているのだと論ずる。

論のなお十分に練れていない所もあるが、物語本文を丹念に読み解き、先行研究をよく整理して活かした立論は評価できるものであり、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。